

川上音二郎の初期作品における音楽演出について

土田 牧子(共立女子大学)

川上音二郎(1864-1911)は、明治二十年代より書生芝居と呼ばれる芝居を始めたことで知られ、新派の始祖、新劇の開祖とも言われる。政談演説に始まるその活動は多岐に及び、妻の貞奴とともに海外で脚光を浴びたこともよく知られる。川上が俳優または興行師として手掛けた芝居は、書生芝居、戦争劇、正劇と称した翻案劇、お伽芝居(童話劇)など様々である。

波乱万丈な人生を生きた川上音二郎については早くから研究が重ねられ、近年も在外資料を含む一次資料の精査により新たな成果が発表された(井上理恵・倉田喜弘ほか)。その動向の真相が詳らかになる一方で、彼の手掛けた演劇の実態については、言及されることはあってもその全貌を把握できているとは言えない。書生芝居を始めた当初から、川上の芝居はその写実味が評価され、歌舞伎とは一線を画した芝居であったと伝えられる。それは具体的にどのよう歌舞伎と違っていたのか、あるいは似ていたのか。

本発表は上記のような疑問に端を發し、川上の芝居における音楽演出を探ってみようという試みである。検証は、早稲田大学演劇博物館が所蔵する川上芝居の台帳を主要資料として行う。演劇博物館には川上の台帳として82点の資料が保存される(台詞書抜、興行成績報告、梗概などを含む)。本発表では、その中から川上の初期の作品、すなわち明治23(1890)年の東京進出から日清戦争劇が人気を博した明治27~28年の間に上演した作品の中からいくつかを取り上げ、その音楽演出の実態を探る。まず、『経国美談』など最初期の作品群で浄瑠璃や独吟、唄、合方などを多用する場面が見られることを、具体例をあげて示したい。『壯絶快絶日清戦争』の頃になると、効果音的な用法が主になってくるものの、ラッパや砲声の音とともに〈流行唄〉や〈時の太鼓〉など歌舞伎の黒御簾で常套の用法もまだ使われていることが確認できる。発表では、こうした音楽演出の変化を、川上の芝居が歌舞伎的なものから脱却していく様相の一側面として捉え、論じてみたい。